

## 4年 金澤史佐

### 「閑上の取材で心に残ったこと」

東日本大震災の被災地、名取市閑上。昨年10月22日、尚絅学院大学の授業の現地取材で、被災者であり閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（60）の体験を聞いた。そこで私の心に残ったことについて綴っていこうと思う。

### 地震直後の体験

2011年3月11日午後2時46分の大地震があり、長沼さんは、仕事先から閑上の自宅に急いで戻った。そのとき、近くで道路に大きな段差ができており、自転車が転がって、近所のおじさんが頭をけがして血だらけでいたそうだった。「大丈夫？」と声を掛け、車のドアを開けようとした時、バイクの郵便局員が通りかかり、おじさんに駆け寄った。

「世話してもらってね」と長沼さんは声を掛け、そのまま家に向かったそうだが、「あそこで車のドアを開けていたら、津波に巻き込まれていた」。長沼さんは家に入り、妻美雪さん（60）と二人、家ごと津波に流されて、奇跡的に助かった。人の運命を分けたのは、ほんのわずかなことだったのだ。

私は、被災者の多くが自分の体験をあまり思い出したくないのだろうと考えていた。が、長沼さんの話に触れ、どんなつらい体験でも、話を聞いてほしい人が必要なのかもしれないと気づいた。

### 「閑上に津波は来ない」

「閑上の土地には、津波は来ない」と地元で言われていたという。大きな地震が起こっても、閑上には大きな被害には及ばないだろう、という思い込みが住民の間にあった、と長沼さんは語った。

1978（昭和53年）に宮城県沖地震があった時も、津波が来なかったという。過去にさかのぼっても、津波の被害があったことが伝わっておらず、3月11日の大地震の際も、人々の津波への想像力は働かなかったのかもしれない。

長沼さんの体験によると、地震の後、誰かが「津波が来るかもしれない」と言って心配したものの、しばらくして何ごともしらぬため、「来ないかもしれない」と別の誰かが言い出し、それが「津波が来ない」という憶測の話になって伝わったという。折あしく市の防災無線は地震で壊れており、消防の無線も聴かれず、携帯ラジオを持っている人も少なく、一番必要だった情報が全くない状態だった。

### 懐かしい閑上の喪失

次に私（が→）の心に残っているのは、「新しい町ができて、にぎやかになっても、まだ来られない、話せない人がいる。それが被災地というところだ」という長沼さんの言葉だ。それは、直に災害を経験した人にしか分からない心情だと思った。被害は

いつか目の前から消えても、終わることないのが災害なのだと感じた。

長沼さんは2019年、かさあげ工事や道路、区画の造成が行われた閑上の新しい街に、仮設住宅から戻ってきた。

復興した街といった表現ではなく、新しい街といった表現を用いたのは、長沼さんの「復興」という言葉への疑問から、あえて、その言葉を使わなかったのだと思う。

「1年、2年、3年、4年と経っていくうちに、古里であるのにも関わらず、昔、友達と遊んだところも、どこがどこかわからなくなっていた」

見たことのない街、それを見ていくうちにも何が何だかわからなくなるといった感覚は「とても寂しいものだ」と長沼さんは語っていた。

災害とは、昔の思い出の喪失や、その寂しさも含めて、災害なのだと感じた。災害が風化していくことではなく、「復興」の意味も知れぬまま街が変わっていくことが、寂しい。長沼さんがそういった表現をしていたところが、強く私の心に残っている。

### 「復興」という言葉の意味

私は、長沼さんの語った「『復興』という言葉が嫌い」という一言が強く心に残っている。私自身も東日本大震災を経験し、一日も早い復興を願っていたが、「復興」とは何をもってして「復興」なのか、その真の意味について考えたことはなかった。

長沼さんが思っていた唯一の「復興」とは、「昔なじみの閑上の住民たちと、住む場所は変わっても、どこかの町で一緒に新しい生活を始めること」だったそうだ。「復興」とは場所や建物のことではなく、当事者の人々の心のありかについて語られているような気がした。

### 「伝承する」ことの重要さ

長沼さんの被災体験を聴き、私が最も重要だと捉えたのは、「伝承すること」だ。災害による悲劇が起こった話は、基本的にタブーとしてあまり語られないことが多い。が、再び同じ災害を繰り返さないよう、悲しく、辛い現実こそ、真摯に伝えていくべきものなのだ。

被災地の状況や被災者の数といったレポートやデータよりも、実際にその災害を体験した被災者がどう感じたか、どのような心境で今を生きているのか、そこで何を訴えているのか—を、次世代に伝えていくことこそが、「災害とは何か」「復興とは何か」を考えるために重要なことであると考えた。

## 2011B07 角張伊織

### 「分からない」復興の意味、嫌いになった言葉

東日本大震災の日、あれから全てが変わってしまった。

閑上の街。自分の知っている街がなくなり、自分の知らない街がここにある。それを、今、復興と呼ぶのだろうか。「よく分からない、だから嫌いになった」—。「あの日」を経験した長沼俊幸さん（60）の言葉を綴りたい。

### 日和山での出会い、長沼俊幸さん

太平洋に面した宮城県名取市の閑上地区にある日和山（海拔6.3m）。昔、出漁前の漁師たちが海の様子を眺めたという人工の小山だ。2011年3月11日の東日本大震災の後も、震災以前のままでの姿で残った。

「震災前の閑上が残っているのは、ここだけなんです。ここに誰かと来れば、この山のこと一つでいろいろな話ができる」

そう語るのは、閑上の語り部であり、閑上中央自治会長である長沼さん。震災が起きた日、海に近かった自宅の2階に妻美雪さん（60）と避難したまま、家ごと津波で流されて一晩を過ごしたという。

「2017年7月、かさ上げで新しく造成された街に家を再建しました。自分の生まれ育った所に戻ってきたかった」、「戻った時はうれしかったし、『ああ、これでよかった』とも思った。でも、それが一年、二年、三年になると、だんだん寂しくなっていく」、「一歩外に出ると、そこは私の知らない街なんです。年を重ねると、昔の思い出がうんと寂しくなる。そういう寂しさも、災害の一つにあるんです」。長沼さんは複雑な表情で続けた。

### 私は復興という言葉が嫌い

昨年10月22日、授業の現地取材で訪ねた私たちに、長沼さんはその後も場所を変えながら多くのことを語ってくれた。

震災当時の日和山からの風景は瓦礫の山だったという。隣接する津波犠牲者の慰霊碑の前では、多数の犠牲者が出た閑上公民館に長沼さんの子どもたちと両親も避難するつもりだったが、すでに人がいっぱいだったために、閑上中学校に車で向かって助かったことを聞いた。その慰霊碑には、旧閑上一丁目、二丁目と地区ごとに犠牲者の名前が刻まれており、長沼さんの家があった6丁目の住民の数が特に多かったことが印象に残っている。

だが、最も強く私の心に焼き付けられたのが、NPOが運営する「閑上の記憶」という追悼伝承施設で長沼さんが発した次の一言である。「私は復興という言葉が嫌いになったんです」

それは、いったいどういうことなのか。

## 復興への思いの経緯、変わってしまった街

被災者、ましてや震災前から長く現地に暮らしていた人であれば、誰しものが復興を望んでいるものだと思っていた。しかし、長沼さんは「嫌いだ」と言い切ったのだ。（これは何故なのか。→）なぜだったのか。

「復興とは何か、分かりますか？」と、長沼さんは問い掛けた。私たちは答えられなかった。それをきっかけに、長沼さんは堰を切ったように語りだした。

「答えられないでしょう？ 誰も、分からないもの、答えられないものを、皆が話していた。答えのないものを、皆が『復興、復興』と騒いでいた。だから、私は復興という言葉が嫌いになったんです」

「私が思っていた唯一の復興というのは、元々そこにいた人たちが、元々いた土地に戻ってくる。それが復興だと思っていた。でも、閑上をめぐるっては、安全な内陸に移転を望む住民、現地再建を推し進めた市の対立で復興事業が遅れたことや、今なおさまざまな事情、心情から閑上には戻れない、戻りたくないという人がたくさんいることもあり、昔の閑上には戻れなくなってしまった」

「昔なじみの住民とまた暮らしたい、と私が考えていた『復興』は4年目くらいにはなくなりました。そこからです、私が『復興』という言葉に違和感を覚えたのは」

この言葉を聞いた時、私は己の考えの甘さを恥じた。長沼さんにとって、現在の閑上は「自分の知らない街」であり、あの日の津波によって変わってしまった街であったのだ。そのことを忘れてはならないと思った。

## 「今」の閑上を見つめて

現在の閑上は、かさ上げされた土地に真新しい住宅や商業施設、学校や公民館が立ち並ぶ。町内会長の長沼さんは、その新しいまちづくりを担う役目も負った。

「現地再建すると決まった時に、もっと皆で話し合えば良かった。何で現地再建をするのかっていう明確なビジョンが行政から示されておらず、あの時に、内陸部の方にまとまって再建していれば、戻ってくる人も多かったんじゃないかと思う」

その言葉に、後悔のようなものが感じられた。しかし、新しく生まれた街の住民との交流について尋ねてみると、「新しく住んだ人たちとは、コロナ禍もあって、あまりまだ交流が進んでいないんです。ただ若い人たちは、町内会の活動について興味を持ってきているみたいですね」と語った。

新たなコミュニティを作り上げようとする未来への期待も感じられ、被災地の歩みはいまだ途中経過なのだろうと感じた。

私はこの取材を通して「閑上」という街から、一度失ってしまった物をもう一度元に戻すことの難しさ、それでもなおそこで生きていこうとする人の強さを知った。大災害の歴史を超えてそこに「ある」ことの難しさ、そしてその「あった」ものへの思いに、この記事を通して少しでも触れてもらえれば幸いである。

## 2011B20 蛸井翔太

### 震災から12年、閉上の被災者が考える「伝承」とは

2021年3月11日の東日本大震災。宮城県名取市は、津波によって964人の命が奪われる甚大な被害を受けた。中でも歴史ある漁港の街、閉上地区の被害が最も大きく、市全体の約8割にあたる753人が犠牲となった。なぜ、ここまで被害が大きかったのか。閉上が沿岸部にあるという理由の他に、「閉上には津波が来ないから安心」という固定観念を持った住民が多かったという。震災後、閉上は市の復興計画によって新しい街が整備された。「かわまちてらす閉上」をはじめとする観光スポットも生まれ、連日賑わいを見せている。震災の記憶を後世の残すための市震災復興伝承館やメモリアル公園もできた。が、閉上中央町内会長長沼俊幸さん(60)は「伝承館は、本当の意味で『伝承』する場になっていない」という。当事者の考える「伝承」とは何か。現在の課題と今後について、インタビューを通して明らかにしたい。

#### 震災復興伝承館の現状

長沼さんは、東日本大震災当日、旧閉上2丁目の自宅で妻美雪さん(60)と共に津波を経験し、自衛隊に救出された。以降、避難所と約6年間の仮設住宅生活を経て、閉上に戻って住宅を再建した。震災後、新たにできた街で新たなコミュニティづくりをしようと、2019年3月に閉上中央町内会長となり、さまざまなイベントを企画・開催している。

名取市震災復興伝承館は、東日本大震災の記憶・教訓を風化させることなく後世に伝承することを目的に、市が20年5月に開設。被災前の閉上の町並みのジオラマや住民の証言などが展示されている。

授業でのインタビューに招かれた長沼さんは「現在の伝承館は、本当の意味での『伝承』する場所になっていない」と語った。伝承館は、市の観光物産課が管理しており、訪問者へ説明する被災体験をした住民ではなく市職員で、展示品がメインとなっている現状がある。

#### 住民と行政の間にあるズレ

長沼さんは、伝承館の管理の仕方の他にも「住民と行政の間に考えのズレがある」と指摘する。

人的被害を受けた被災地において、行政には「新しい住民を含め、現在生活している人もいる」という理由から、被災した建物を形として残そうとしない考えがある。悲慘な記憶のイメージは新しい街にふさわしくない、という配慮なのだろうか。

一方で、語り部をしている当事者には「伝承のためには、災害をありのままに訴えかける遺構を残すべき」という考えがある。

この違いからか、長沼さんは「行政側が語り部の方々に対して、あまり良い顔をしない時がある。直接言葉にして言われたわけではないが、過去の災害を『隠そうとしている』ようにも取れる」と率直に語った。

#### 「人が伝える」かけがえのなさ

市震災復興伝承館の現状、被災地からの発信のあり方をめぐり、住民と行政の間のズレなどの課題を踏まえて、当事者である長沼さんは「本当の意味の伝承」の意味を教えてくださいました。

1つめは、伝承には行政の力も必要であり、「住民と行政が一体となって語り継ぐことが大事だ」。現状は、被災した当事者たちが自身の体験を伝えているが、時間が経ち、世代が変われば、「伝承」し続けることが難しくなる。個々の力では限界があり、行政の協働が必要である、という。そのためにも今、住民と行政の間で「伝承」の在り方について議論する必要がある。

2つめは、震災復興伝承館において「人が語り伝える」ことのかけがえのなさである。長沼さんは、現場のガイド役について、「今、震災の伝承活動をしている人たちに委託したらどうか」と提案した。訪問者にとっても、閉上で起きた事実を直に教えられ、展示された遺物の数々の意味もより生かされる。震災は遠い「過去」ではないのだ。

いつ来るかわからない次の震災、津波に備えて、本当の意味の「伝承」は責務である。そのためにも、今、長沼さんが提起した課題に取り組まねばならない。

## 2011D02 石井理帆

### 震災の記憶、伝えたい～過去の教訓を生かすために

2011年に起きた東日本大震災からまもなく12年。「震災を知らない世代」が増えてきた。毎年、3月11日が巡るたびに「風化」が語られ、その危機感の表れともいえる動きが報じられる。津波被災地の一つ、宮城県名取市の閑上地区では、震災の記憶を伝えようとする活動が今も続けられている。教訓を風化させないのと同時に、その記憶を未来へ引き継いでいくために、私たちがなすべきことは何なのか。

#### 被災地・閑上取材で訪ねて

昨年10月22日、閑上地区を授業の取材で訪ねた。尚綱学院大のバスから外を眺めながら被災当時の状況を想像し、その後、震災前から残る日和山（海拔6.3メートル）に上った。地元の被災者であり、現在は閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（60）から話を聞いた。

閑上を一望できる日和山からの眺望に唖然とした。震災前にあった古い町の何もかもが流され、今は見渡す限り、かさ上げ工事で生まれた（平地→）真っ平らな土地だ。長沼さんからは当時の状況、これからへの備えなど、色々な貴重なお話を聞くことができた。

地元のNPOが運営するプレハブ造りの追悼伝承施設「閑上の記憶」に移動し、震災当時、閑上を襲った津波による凄惨たる様子の記録動画を見た。轟音をたてて迫り来る津波とともに、逃げ惑う人々の悲鳴や嘆きの声も生々しく残されており、真っ黒い海が町をゆっくり、むしばむようにのみ込む姿が強烈に印象に残った。

#### 災害体験を今後どう残すのか～語りは災害伝承の手段

災害が発生した地域では、その記憶と経験を後世に残そうと、さまざまなカタチで伝承の活動が行われている。特に東日本大震災の被災地では、体験者による「語り部」の活動が盛んだ。

実体験の語りは、より強く訴えかける力を持つ災害伝承の手段の一つである。そのことを踏まえて私は、当事者の語りを何らかの媒体に記録し、いつでも再生し共有できるようにしておく「バックアップ」づくりの方策を考えた。

閑上には昭和8（1933）年3月3日に起きた三陸地震津波の「震嘯記念」の碑が立っており、同日の大地震により発生した津波の様子や被害の内容が記されている。しかし、先人が石碑に残した過去の事実を含め、閑上で起きた災害、震災の経験と伝承が地元の人々に共有されず、東日本大震災では住民の対応が混乱した。

長沼さんの証言によれば、閑上で800人近い犠牲者が出た原因として、「閑上には津波が来ない」という固定観念があったという。

犠牲者の中には、避難を開始したが逃げ切れなかった人、被害を軽く考えて避難しなかった人、家族を助けようとして避難が遅れた人、任務のため避難が遅れた消防、警察の人など理由は多様であったという。しかし、それらの人々の声は伝わっているのか。

東日本大震災から12年という時間の経過に伴って、震災を経験していない人が増え、地元

からの情報発信が共有されづらくなっている。震災の記憶と教訓を広く全国や世界、そして次世代に伝え続けていくことによって、未来に起こり得る災害に私たちは備え、同じ犠牲と混乱を繰り返さない覚悟を持つことができる。

### **一番に伝えたいこと～風化を止め、自分にできることを続けたい**

「3.11」の教訓を風化させないためには、時とともに変容する被災地の状況を写真や映像で記録し、終わらぬ現実であることを同時代に、そして後世に伝えていくことである。

毎年3月11日には、閑上をはじめ各地の被災地で追悼イベントが催され、「3.11を忘れない」というメッセージを世界に向けて発信している。震災を経験した世代だけの追悼行事ではなく、次の世代に共有されていくことが大切である。震災経験のない若い世代に防災意識を受け継いでもらうため、新たな当事者の意識を持って参加してもらうべきだ。

過去の災害をいつでも振り返り、災害の記録や記憶を集約し、防災・減災を地域の暮らし、文化にまで根付かせる。そのためにこそ共有のための「バックアップ」づくりと活用の普及が必要だ。これから予想される南海トラフの大地震・津波だけではなく、全国で毎年のように新たな被災地を広げる豪雨・土砂災害や洪水などの巨大災害への備えにも役立つのではないか。震災体験者の一人として、風化を阻止し、3.11を忘れないために、これからも自分にできることを続けていきたい。

## 2011E23 西澤広捷

### 「先が見えない」復興におけるコミュニティ作りの難しさ

東日本大震災の被災地となった名取市閑上地区。そこでは、語り部としても活動している閑上中央町内会長、長沼俊幸さん（60）にお話を伺った。今年3月11日で大震災から12年。新しい閑上の街では道路の整備や街並みづくりが進み、一見すると「復興」しているように映る。しかし、長沼さんは「復興をすることはないだろう」という。当事者にしか分からない、見えない課題とともに、その思いを聴いた。

#### 「復興」の定義の違い

外部の人の目には「復興」がなされ見えるのに対し、震災の当事者である長沼さんは「復興することはないのだ」と答えた。その現実認識に違いがあるのは、「復興の定義」が異なっているからではないか、と私は考えた。

外部の人にとっての復興の物差しとは、主にハード面であろう。長沼さんは、閑上という土地そのものではなく、「人が戻る場所」に意味があると話した。「中には、場所、あの閑上っていう場所をつくれれば、またこの閑上って街ができるって人もいるけれども、場所なんてどこでもいっしょ。閑上の人たちの、そのつながりが重要なんだ」

復興することはない—という考えは、はじめから持っていたものではないという。「閑上の人たちと、場所は変わっても、どこかの町で一緒に新しい生活を始める」ことこそが、長沼さんの中で唯一の「復興」だった。しかし、「安全な内陸への移転」を希望した多くの住民に対し、名取市は「現地再建」の新しい街づくり案を推し進めた。「もう戻りたくない」という住民が多数になり、揺れ動く現実の中で「震災から4年目くらいに、私の考えた『復興』はなくなった」。

震災以来、テレビや新聞などで「復興とは何か」が問われ続けてきた。長沼さんもいろいろな人に会うごとに問い、しかし、誰も答えることができなかったという。「そんな答えのないものを騒いでいたのか—と、復興という言葉が嫌いになった」。

#### 復興から27年、神戸から学ぶ

長沼さん曰く、閑上ではインフラや道路の整備、街並み再建などハード面での復旧が進む一方、現実の一番の問題は、コミュニティづくりにある。この問題は、新しい街並みのように目に見えない、人と人之间にあるため、分かりづらいという。震災前からの閑上の住民、震災後に外から移住してきた新住民の交流とつながりをどうつくるか、自治会長である長沼さんは悩み続けてきたという。

そんな時に参考としてきたのが、1995年1月に阪神淡路大震災が起きた神戸市の経験だったそうだ。被災地復興の先輩ともいえる神戸との縁は、東日本大震災の後、ボランティアの活動先を探していた、兵庫県の「ひょうごボランタリープラザ」所長、高橋守男さんとの出会いからだという。

当時、仮設住宅を訪れる支援者の多くは、一度来たらそれきりで、寂しく思っていた、と



長沼さん。そうした心情を同じ震災経験者として共有していた守男さんは、神戸からの継続的な支援、交流を行っていくことを決めたという。

2人の絆を通じた閑上と神戸の交流は現在も続いており、毎年3月11日、閑上で心の復興のシンボルとして、犠牲者の名前を記す竹灯籠に火を灯している。「交流を重ねていく中で、コミュニティづくりを学ぶことが多くあり、『人と話す、つながる』という部分を大切にしている」と長沼さんは語る。

### コミュニティ再建への使命感

東日本大震災から今年で12年が経過する。いまだに閑上の新しい街づくりは途上にある。長沼さんは閑上中央自治会長として、コミュニティづくりという先の見えない課題に取り組み続けている。「自分の代では満足いく結果を得るのは厳しいんじゃないか」との思いもあるというが、長沼さんは、今の世代と次の世代をつなぐ希望の架け橋のような存在となるに違いない

## 2012A10 蝦名勇直

### 「地震があったら津波に用心」～未来に生かせるのか、石碑に託された伝承

名取市閑上に日和山という場所がある。そのふもとに、「地震があったら津波に用心」と記された石碑が立つ。2011年3月11日の東日本大震災の津波で、800人近くの死者・行方不明者が出てしまった閑上。なぜ石碑の警告は伝承されなかったのだろうか。どうしたら未来まで伝承を生かしていけるのだろうか。そして、私たちにできることは何だろうか。地元の津波体験者、長沼俊幸さん（60）の証言、そして現地取材に行き感じたことを織り交ぜながら考えていきたい。

#### 日和山と向き合う石碑

日和山は標高6.3m。漁師が出漁の際に、天候を見るために築山されたものである。日和山から見える景色は、海側には工場が点々と建っており、反対側に目を向けると新築の住宅街が広がっている。それと向き合うように立つ石碑には、昭和8年（1933）に起きた昭和三陸津波の様子や被害の状況が記されている。そして、震災後に整備された道路を挟んだ広場には、東日本大震災の津波で亡くなってしまった名取市民の名前が刻まれた慰霊碑がある。

#### 薄れた伝承、3.11で多くの犠牲

なぜ、「地震があったら津波に用心」と記された石碑が地元にあったにもかかわらず、閑上では800人近くもの死者・行方不明者が出てしまったのだろうか。昨年10月22日に取材した長沼さんはこう語った。

「ここには津波は来ないんだ、そう親父は言っていた」。昭和三陸津波から100年もたたずして、石碑の伝承は途絶えるどころか、間違っただけの内容になって後世に伝わっていたのだ。さらには、「昔の難しい字なので、興味がなく読んでもみなかった。が、震災後に初めて読んでもらい、その石碑に記されている文字の内容を知った」

東日本大震災の前からあったにもかかわらず、その石碑はほとんど存在していないかのようなものだった。震災以前はどのような形でこの石碑があったのかは分からないが、確かに難そうな漢字で記されており、近くに石碑の内容を訳した案内板もなく分かりにくい。

しかし、石碑の冒頭部分にははっきりと「地震があったら津波に用心」と記されている。石碑の内容は間違っただけで伝承され、そもそも石碑の存在意味が消えていたため、悲しくも800人近くの死者・行方不明者が閑上で生まれてしまったのだと考える。

#### 未来に生かしていくために

では、どうしたら災害の教訓を未来に残していけるのだろうか。長沼さんは「こうして私が、皆さんに東日本大震災のことを話して、それをまた皆さんが家族や友達（など）らに、私が話したことを伝えるだけでも伝承になる」と語る。しかし、それだけでは足りないという。

「伝承していくには、行政の力が必要になってくる。今の伝承館（震災後に名取市が開設したし震災復興伝承館）は、伝承というよりも観光物産展になっている気がする」

伝承館は、震災前の閑上の街のジオラマや、復興に関わった方たちの証言などで構成された震災後の歩み、自然災害や防災について展示がなされている。だが、閑上の被災を直に伝える語り部が常にいるわけではないし、特に目新しい活動をしているわけでもないように思う。このままでは、伝承館ですら存在意味がなくなっていくのではないかと、という印象を受けた。

長沼さんが訴えたのは、私たちが震災を知らない人たちに伝えていく努力だった。では、私たちに具体的に何かできることはないだろうか。私が考えたのは、東日本大震災だけでなく、他の災害について学べる機会を設けたり、SNS やインターネットを活用して閑上のことを広く発信していくというものだ。そして、この記事を読んだあなたも、古里の震災の体験を未来に残していくために何かできないか、考えてほしいと思う。

2012C23 村上雅基

## 防災で大切なことは、過去を知ることだった

過去の出来事を後世に伝えることの大切さを痛感した、2011年3月11日の東日本大震災。「あの日はもう戻ってこないからこそ、次はしっかり後世に語り継ぐ」。そんな意志をもって被災地・名取市閑上に生きる長沼俊幸さん（60）の思いを聞いた。

### あの日、何が起こったのか

震災前、歴史ある漁港の街、閑上には約5500人が暮らしており、「閑上ビーチ」は夏の名所となっていた。名取市出身である私も、家族や保育所、小学校の友達や家族たちと閑上ビーチや閑上海浜プールで遊んだものだ。しかし、その懐かしい風景も12年前、たった1日で変わり果てた姿になってしまった。そう、東日本大震災だ。

東日本大震災では、宮城県牡鹿半島の東南東沖130キロを震源とする地震が起こり、マグニチュードは9.0もある日本の観測史上最大規模の揺れであった。その後の津波襲来により、閑上ではおよそ800人もの住民が亡くなった。これは一つの地区単位で見た場合、おそらく被災地の中で一番の犠牲者数であろう。

### 「思い込み」が被害を拡大させた

「閑上の街だけでこんなに犠牲者が出てしまったのは、過去の経験による思い込みがあったのかもしれない」

昨年10月22日に授業の現地取材で聞いた、津波の体験者で閑上中央町内会長、長沼さんの言葉だ。

宮城県沖を震源とする地震では、1978（昭和53）年6月の宮城県沖地震があった。この地震は、東日本大震災よりは規模が小さいが、それでも仙台市で死者16人など、多数の犠牲を生んだ。

この地震で、結果的に閑上には津波は来なかった。しかし、思い込みは時に命取りになってしまう。東日本大震災で閑上に甚大な被害が発生した背景には、少なからず、過去の経験による「今度も津波は大丈夫だろう」という思い込みがあったのではないだろうか。

### 過去を知る、伝えることの重さ

実は閑上では、90年ほど前に津波の被害を受けたことがあり、それを後世に伝え、二の舞いにならないように、という願いで建てられた石碑がある。1933（昭和8年）3月3日の昭和三陸大津波の教訓を記録した「震嘯記念」の碑だ。

その石碑は、閑上に住んでいた人なら誰でも分かるほど大きく、『地震があったら津波に用心』と刻まれ、目立つ場所に建っていたという。

長沼さんは「石碑があることは昔から知っていたが、何が記されているのかまでは知らなかった。誰も石碑のことや、昔の津波の話をしてこなかった」と語った。

過去の出来事を未来に語り継ぐことは何よりも大切であり、形にして残すことはもっと伝

承の力を強める。しかし、年月が経つと、人の記憶は風化していき、忘れ去られていってしまう。

また、形ある物にして残すことも、生活環境の変化や、物そのもののも風化による欠損もあり、100%のメッセージを伝えることは困難といえる。

だからこそ、常に語り継ぐ機会や場をつくることが、記憶の風化に抗う意味でも重要なことだと、今回の現地取材で痛感した。

私は、津波こそは免れたものの、地震による被害を経験した。また、今の小学生たちはほぼ全員が東日本大震災を体験しておらず、また産まれて間もない頃だったため記憶にない世代になる。だからこそ、あの日の出来事を知ってもらい、語り継いでいくこと努力は決して絶やすべきではないと思った。

2112A20 郷古健太

## 日和山から見えるもの～長沼俊幸さんと考える復興

日和山はずっと見てきた。歴史ある漁師町としての閑上、2011年3月11日の津波被災地としての閑上、そして今の閑上を、日和山は変わらずにずっと見てきた。東日本大震災以前の閑上の面影を、唯一残す日和山から、長沼俊幸さん（60）の取材は始まった。一人の閑上住民の体験を振り返りつつ、「復興」とはいったい何なのか？に迫りたい。

### 「あの日」の閑上

昨年10月22日、私は学外学習の取材で、初めて閑上地区を訪れた。バスに揺られて現地に入ると、大きな生鮮食料品のスーパーや新築の家が並び立ち、震災の爪痕を感じることはできなかった。しかし、バスを降りた広場にある、名取市民の犠牲者を慰霊する石碑のものの言わぬ名前の列が、あの日の悲劇を物語っていた。

現在、閑上中央町内会長である長沼さんは、あの日を振り返り、「自分たち家族が、何で生き残ったのか今でもわからない」と語った。午後2時46分、自宅から離れた仕事場で大きな揺れに襲われ、すぐに、旧閑上6丁目の自宅にいた家族の安否確認に向かった。40分ほどで自宅に着き、子どもたちと両親を避難させた後、外から消防団の怒号が聞こえたという。「津波が来るぞ!」。同3時50分ごろ、壁のような津波が閑上をのみ込んだ。

長沼さんは、一緒にいた妻美雪さん（60）と2階に上ったが、そのまま家ごと津波に流されたという。その時、窓の外を覗くと、見慣れた古里の街並みはそこにはなく、一面に黒い海が広がっていた。凍てつく寒さの中、夫婦は屋根によじ登って一夜を明かした。家族と電話がつながり、全員の無事が分かったのは、その日の夜中であった。

閑上地区の住民6500人のうち750人余りの命が、津波によって奪われていた。

### 「復興」をめぐる乖離

震災後の閑上は、日和山を除いて、住民の多くも、家並みも全てが、まるで漂白されたように、かつての色を失ってしまった。しかし、そうした苦難の中でも、再生を模索する日々は続いていく。

閑上の再建は難航した。住民の希望は「安全な内陸への集団移転」が多かったが、名取市は現地再建案を推し進め、意見は割れた。市は最終的に、海に近い災害危険区域のみを集団移転とし、他は現地再建という方針を決めた。住民の多くは「閑上に戻らない」という選択をした。

更地になった閑上が、かさ上げ工事を経て、それからは着々と今の街並みが整備されていた。漂白されたかのような閑上が再び色づき始めたのだ。そして2020年3月、名取市長が「復興達成」を宣言した。

市はハード面の土地造成、再建を急ぎ、新しい町並みを造ったが、震災以前にあった、かけがえのない古里が流された住民たちは、それを認めたのだろうか。あまりに一方的な宣言だったのではないだろうか。

今、長沼さんは新旧住民のコミュニティづくりに悩む。そして、「復興」という言葉が嫌いだという。理由は「誰に聞いても、復興とは何か？の返事が曖昧だから」だそう。私も取材中、長沼さんから問い掛けられたが、明瞭な返事ができなかった。復興とは何だろうか。この疑問が大きく膨らんだのは、この問い掛けからだったように思う。

### 震災前の閑上を忘れない、伝承の活動

「震災の後、日和山に行くと必ず、知り合いに会えた」と長沼さんは語る。この日和山から、以前の閑上を知ってもらうための活動を開始したという。

最初は、閑上を初めて訪れた人たちへの活動であったが、現在では、私たちのような大学生への語り部はもちろん、新聞などの取材にも伝承活動の幅を広げている。以前の閑上は元に戻ることはないかもしれない、しかし、閑上について伝えていくことはできるのだ。

### 「復興」とは何か？

一人一人に個性や生き方があるように、一人一人にとって「復興」の定義や意味の重さは違うだろう。ゆえに、「復興とは何か？」という問いに明確な答えはないのかもしれない。

ただ一つだけ確かなのは、長沼さんの話を聞いて、あれこれと考え、記事を書いている今の私や、この記事を読んでいる誰かも今まさに、復興の担い手となる可能性や希望が等しく存在するということである。

## 2211A01 相澤朋季

### 災害救助法の限界～被災者が証言する「仮設」の暮らし

東日本大震災の被災地である宮城県名取市閑上。被災者となり、現在は閑上中央町内会長としてこの地に住む長沼俊幸さん（60）は、長い仮設住宅暮らしを経験した。長沼さんは苦難を知る当事者として、今後起こる災害に備えて「『災害救助法』を変えてゆかなければならない」と繰り返し訴えている。その思いを聞いた。

#### 仮設住宅での日々

長沼さんは、2011年3月11日の津波で自宅ごと流されて九死に一生を得、2カ月半の避難所暮らしを経て、仮設住宅に6年間半入居した。長沼さんは仮設住宅について不安があったという。しかし、避難所での周囲の目を気にする毎日や、風呂の入浴時間も制限される不自由な生活を送り、仮設住宅に入居することが決まった時は「少しでも日常の生活を取り戻せると思い、そのことが何よりも楽しみで、うれしかった」と振り返る。

そして、いざ入居すると「内装がきれいで、寒くなく、うるさくなかった」。長沼さんが入ったのは、ハウスメーカーによって改良された仮設住宅だった。長沼さんはしみじみ、「よかったなあ」と少なくとも入居時はそう思っていたが、生活するにつれ、だんだんと仮設住宅をめぐる問題が浮き彫りになっていく。

#### 浮き彫りになった格差

「最初に思ったのは仮設の違いね、全然違うの」。長沼さんが仮設住宅の格差を感じたのは、別の仮設で暮らす親友の家を訪れた時だった。そこ（親友の仮設住宅→）は、長沼さんが住む仮設とは違い、工事現場で使われるようなプレハブ造りだった。そのため夏は暑く、冬は寒く、音もうるさい。「特に格差を感じたのは、風呂の追い焚き機能の有無だった」と語る。

長沼さんが入居した仮設のように、追い焚き機能があると、風呂が冷めた時にボタン一つでお湯を温め直すことができる。しかし、そうでないと、もう一度お湯を捨て焚き直す必要があった。当たり前前の生活を送れた人と、そうでない人の間で格差が生まれたのだ。

その後、こうした格差がメディアで報道され、徐々に問題は改善された。が、それも結局は後付け工事の繰り返しで、余分な工事費用の負担が発生した。「最初から等しい条件の工事をしておけば、格差は生まれなかった」と語る。そして長沼さんは「仮設住宅をめぐる問題の根底には、災害救助法が関わっている」と証言する。

#### 「時代遅れ」の法律

災害救助法は、国や地方公共団体による災害時の応急的な救助を目的とした法律だ。制定は戦争から間もない1947（昭和22）年で、仮設住宅の設置期間もわずか2年間だ。長沼さんは「時代遅れの法律を無理矢理にでも、現代の大災害に適用させようとするから結局、屋上屋のような後付けの繰り返しになってしまう」と訴える。避難生活が6年余りに及んだ東日本大震災のような災害に対応できなかったという。



この問題がメディアで報道されると、格差は徐々に解消されたが、最後まで解決できなかったのが仮設住宅の「狭さ」だった。必用最低減の生活を送っていた避難所から仮設住宅に移り、だんだんと私物が増え、子どもの成長など家族の暮らしも変化し、部屋の狭さを実感した。

不便さに限界を感じて、入居者の退去で生じた空き部屋を「子どもの勉強部屋や、荷物の置き場のために利用できないか」と市役所の担当者に申請したが、返事は「国の災害救助法に違反してしまう」という空き部屋利用の拒否回答だった。

「こうした事実はメディアでも報道されなかったため、誰にも知られず、また大きな災害が起これば同じように不便な状況に苦しむ人が生まれる。だからこそ、災害救助法を改正させなければならない」と長沼さんは訴える。

### 教訓を活かすために

「仮設住宅は不便で当たり前。確かにそうなんだけど、そこに暮らさざるを得ない人にとって、不便なものは不便なんですよ。災害救助法を変えていかないと」

長沼さんは、一人の被災者として、また仮設住宅で入居者仲間の世話役、代弁役を担い苦労した経験からも、災害救助法の改正を繰り返し訴える。災害救助法は今の生活常識に合わず、限界を迎えている。それは、これからも災害と向き合わねばならない私たちの「人間らしく生きる権利」にも関わる。長沼さんが訴える教訓を活かすために、私たちは災害救助法を知り、変えていかなければならない。

## 2211D24 新山新太

### 失われた「ツバメの巣」～長沼俊幸さんが想う閑上の過去と現在

東日本大震災の被災地、名取市閑上。現在、閑上中央町内会長の長沼俊幸さん（60）は、2011年3月11日の東日本大震災を経験し、九死に一生を得、がれきとなって荒れ果てた古里を見た。その当時をもはや想像できないほど、現在はきれいな街並みが生まれ、新旧の住民が集い、暮らしている。「復興」していると誰しもが思える風景なのだろうか。長沼さんはそうは思わなかった。それはなぜなのか、何がこの閑上という土地から失われたのか。長沼さんの想いに迫る。

#### 閑上の暮らしと「ツバメの巣」

長沼さんは幼少期から閑上の街で育ち、人一倍、古里への思いが強いという。過去と現在の閑上を生き、今は何を思うのか。昨年10月22日、授業の現地取材で出会った長沼さんに話を聞いた。

閑上では昔から周りの住民との距離感が近く、家の玄関や車の鍵などは閉めずに外出していた。また朝夕、おすそ分けをし合うために他人の家に自由に上がるような日常があった。住民同士、それほど周りへの信頼があったのだと回想する。

そんなある日、長沼さんの古い家の玄関先に、ツバメが巣を作った。ツバメの巣ができる家は繁栄する、という良いジンクスがあり、一家は喜んだそうだ。1年目、2年目とツバメの家族も増え、3年目には家の中にまで巣を作ったという。

ツバメたちが出入りできなくならぬように、玄関の扉を開けっ放しにしたり、おじいさんがツバメの世話をしたりしたという。そんな朗らかな暮らしがあった。

しかし、良い思い出だけでなく、嫌な思いをしたこともあるそうだ。漁師の人たちのお手伝いをした経験があり、網にかかった小さい蟹を潰すという作業であった。長沼さんにとって臭いが酷く過酷だったという。

仙台などから来た人々が楽しそうに観光をしている姿にうらやましさを覚えたこともあり、漁師の手伝いをしているそばをを通り過ぎる時、嫌な顔されるのも悲しい経験だったそうだ。しかし、そういった経験を振り返っても、良い思い出ばかりだったという。そう語る長沼さんから、閑上への愛が伝わった。

#### 変わり果てた古里

そんな穏やかな生活が、東日本大震災（が起きた→）とともに崩れ去った。そして多くの人々が暮らす、さまざまな地域に被害をもたらした。閑上は海沿いであることに加え、住民たちには「閑上に津波は来ないという思い込みがあった」（長沼さん）といい、結果として多くの犠牲者を生んだ。

閑上地区の人口は2011年2月末に約5600人であったが、同年9月末には約2400人にまで減少した。死者数や不明者数に加え、閑上から離れていった人々も多かったそうだ。家々も崩壊し、跡形もない状態になった閑上を見て、長沼さんはとてつもない虚しさと悔しさを

感じたという。

### それからの閑上と「復興」

それから12年が経ち、だんだんと新しい街が整備されていった閑上。現在は大きなスーパーマーケットができ、復活した「ゆりあげ港朝市」や、「かわまちてらす閑上」などの観光・商業施設もあり、さまざまな人が足を運ぶスポットになっている。私自身も足を運ぶ機会がしばしばあり、花火が打ち上がる夏祭りなどにも参加した。

私を含め多くの人々には、今ある閑上の姿がとても輝いて見え、憧れの街とさえなっている。だが、長沼さんは違っていた。新しい閑上は、自身が育ってきた「人と人の日々の絆」があった当時と、全く違う街だそう。温かなコミュニティが震災で失われ、地域の住民同士のつながりは途切れた。

新しい閑上の街づくりとは、自治会長である長沼さんにとって、昔ながらの閑上の住民、新しい閑上に移住してきた若い家族らをつなぎ、一度は失われたコミュニティの温かさを紡ぎ出すこと。それが、長沼さんにとって唯一の「復興」なのかもしれない。そのころには、ツバメたちも閑上に戻ってくるだろうか。

## 2211E22 長沼聖菜

### 震災から12年 被災地が見出せぬもの～家や街の再建だけではない「復興」の意味

忘れもしない、2011年3月11日に東日本大震災は起きた。その被災地の一つが名取市閑上だ。昨年10月22日、大学の授業で私たちが取材した閑上中央町内会長、長沼俊幸さん（60）は津波の経験者であった。長沼さんは取材中に幾度か、「復興とは何だろう？」と語った。私が見た現在の閑上は、広い道路が整備され、新しい住宅も立ち並び、にぎわいに戻ってきていると感じた。だが、長沼さんは「復興」という言葉に違和感を持ち、「嫌いだ」と言う。なぜ、長沼さんはそう感じるようになったのだろうか。

#### 取り戻せない景色と思い出

震災前、歴史ある漁港の街だった閑上には約6500人の住んでいたが、津波によって750人余りの死者と35人の行方不明者が出たという。旧閑上6丁目にあった長沼さんの自宅を含め、家という家は津波で流され、長沼さんが子どもの頃に遊んだという界隈も今は、正確にはどこか分からないという。

私たちが閑上の取材で訪れた場所に、日和山という、少し登ると小さな祠がある小山があった。長沼さんは「ここだけが、震災前の閑上が残っている唯一の場所だ」と語った。「震災で街がなくなった後、寂しくなると、ここへ来れば誰かと会えて、話をした。それができる唯一の場所だった」

津波は建物だけではない、住民の大切な思い出も壊し去り、ささやかな日常の交流も奪っていったのだ。

#### 行政主導の「復興達成宣言」

閑上は、被災地から離れた土地への集団移転ではなく、現地再建による街の再建が行われた。名取市は住民の離散を恐れて現地再建を主導したが、住民は津波への不安から移転を希望する人が大多数で、合意形成ができず、3年間、何も進まなかったという。

その後、市は防潮堤を一次防御、避難道路を二次防御とした「多重防御」や土地のかさ上げを計画し、「安全な街になる」と住民を説得した。だが、「信じることはできなかった」と長沼さんは語った。津波を経験し、とりわけ家族を亡くした人たちの心情はそうだったのであろう。

閑上の住民たちが戸惑い、仮設住宅に住む生活の先にまだ展望を描けなかったころ、名取市長が2020年3月30日に「復興達成宣言」を行った。

#### 被災者の心のギャップ

この情報は住民たちに事前に伝えられておらず、突然の「宣言」に長沼さんらは大いに戸惑ったという。新しい閑上の「まちびらき」が前年5月に行われ、仮設住宅から現地に戻って1年も過ぎておらず、住民たちには何かが達成された自覚はなかったという。テレビや新聞でも「復興」の文字を何度も見かけるが、昔の風景や人々の暮らしは戻ってこない。

「そんなことから『復興』という言葉に違和感を持ち始め、誰に問うても答えを得られない言葉に疑問を深め、嫌いになったのだ」と長沼さんは語った。

私は、行政が整備した道路や新たに住む場所、つまり生活の場の確保だけでは「復興をした」とは言えないと強く感じた。懐かしい思い出や古里の人々を取り戻すことはできないが、まず何よりも「心の復興」というものが不可欠なのではないか。

### 「復興」という言葉の意味

長沼さんが語ったように、私も「復興」の言葉の意味は分からないし、答えられる人はいないだろうと感じる。しかし、この言葉を考え続けることにこそ意味があるのではないか。

閑上の住民たちが突然の「復興達成宣言」に驚き、自分たちが希望した復興と現実との間に大きなギャップを感じたことから、行政はまず地域の当事者たちと密接に意思疎通を行うべきだったと強く思う。

私は今後、「復興」という言葉を見つけるたびに、今回の取材で聴いた話を思い出し、その言葉の意味を考えるだろう。これを読んだあなたも一度立ち止まって考えてほしい。「復興」とはいったい何なのかを。